
黎明の欠片

萩野 晴哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黎明の欠片

【Nコード】

N5598V

【作者名】

萩野 晴哉

【あらすじ】

全ては10年前に起きた残劇から始まる物語。

便利屋のような街外れのちっぽけな事務所が落とし物から暗殺までなんでもやっちゃうようなお話、かもしれない。

今、五つの世界と幾つの人と一つの記憶が絡み合う――

— Prologue — 復讐劇

I Prologue

その場だけを囲むように真っ赤に広がる紅蓮の炎。幾つもの人々が山のように積み重なり、それに包まれている。生きていた、筈のそれは半分以上の物が足りていなかった。在るべきもの、それは、身体。内側の臓器ではなく、外側の肉体がまるで足りていなかった。

頭と身体が切り離されている物。下半身と上半身が裂け、内臓や腸が飛び出している物。四肢だけが失われている物。何かに食いちぎられたかのように肉片が消失している物。

他には、五体満足でも、この鼻を刺すような臭いにもがき苦しんだのか、自らの喉を掻き毟った物まで。

そんな物達が流した夥しい量の生臭い血がまた別の異臭と混ざりあい鼻を掠めた。

先程まで閉じ込められていた少年は、目の当たりにしたこの景色に嫌悪感を抱いたものの、不思議と気絶などと言う概念に襲われずにいる。

——もう、生きている者はいないのか？

そんな思考を抱えながら、悪臭と吐き気を催してくるこの空間を見渡せば、一人の影が見えた。肉片と化した物体の横を通り過ぎながらその人影の元へと近付いていく。

うずくまるそれは、無造作に伸ばされた髪を適当に結った小さな少女だった。赤に照らされる漆黒の髪が、熱によって起こされた不快な風に吹かれ、揺れる。

少年が近付けば、その光を点さない絶望の闇が向けられた。少年とよく似た、真っ黒な瞳。幼き少女と幼き少年は、とてもよく似てい

た。

少年は少女に手を伸ばせばその薄汚れてしまった頬を撫で上げる。汚れを拭い取るかのように、何度も撫でた。

「……………おにいちゃん」

少女は、儚い瞳で泣きそうなのを堪える少年に、小さく口を開く。紡ぎ出された声は、空間には似合わずとても綺麗だった。

何日も聞かなかった、それ。閉じ込められる前から聞けなかったそれ。

少年は涙を抑え切ることが出来ずに涙を溢す。

「ウイン、グ……………お、れ…俺の、う、せいで……………ひつく、…みんな……………」

「ちがうよ、おにいちゃん」

「だけど、俺、が……………う、あいつらに、連れて、かれれ……………ヒック、ば……………」

「……………そしたら、ここ以上にヒガイふえるから。だから、おにいちゃんをわたすわけにはいかないって、お父さんとお母さんが言ってた」

「ヒック、う、ん……………ウイングう……………」

少年は、ウイングと呼んだ少女を、撫でていた手を背へと回して抱き締めた。嗚咽を上げ、鼻を吸る三つ年が上の兄を彼女はその頼りなく震える背を優しく撫でる。片目を隠すように伸ばされた前髪を

かきあげて、こつん、と自分の額を兄のそれへと当てた。

大丈夫、私はいるよ。ここに

とでも言うかのように。

額を離せば、左目につけられた彼の眼帯をなぞり、そつと手を離す。周りに倒れる物体は、兄であるウィンド・オブ・カストロフィの瞳を狙って来た物と、それを死守しようと立ち向かった物だと、幼いながらに二人は理解していた。

彼の瞳に、どんな能力があるから知らない。しかし、それは目覚めたのか今年の冬に、左目だけ色が変わってしまった。とても綺麗な群青の色だったとウィングは記憶している。噂によればウィングもそのようなものを称えていると聞く。

覚醒してしまったそれは広く知れ渡り、そして……今日のような残劇を引き起こしてしまった。

「……俺、どうしたら……いい、んだ……ろ」

「…きっと、しんではいけないと思う」

「じゃあ、それなら、また」

「同じようなヒゲキをおこさないようにかくれて生きてけば」

「……それは、見つかってしまうかもしれない。もしかしたら、ウィングのも覚醒してしまうかもしれない、だから……死んだことにしよう」

「幸いにも、生きて出たものは誰もいないはずだから、きっとばれないよ」

泣き止んだ少年は少しずつ沈静を見せ始める炎を見て、涙で歪んだまま、ウイングに笑いかける。そのせいか、顔が見えにくく暗くなってきたから余計に悲しく見えた。ウインドは少女の手を取れば小さな歩みを始める。

もはや原型を留めてない肉片を横切りながら。再び涙を溢しながらも歩いていった。まるで背徳の場所から消え去るように。

その後、彼らが何処に消えたのか知る者はいなかった。

世界へと知れ渡ったこの残劇は「血の炎」と名付けられ、生存者は0、全て炎に焼かれ何も無くなったと言われている。

第一刻第一話：黎明堂（前書き）

Prologue

人物紹介

ウィング・オブ・カタストロフィ（Wing・of・Catastrophe）

年齢：不明

性別：女

出身：魔力

残された血縁：兄

現在：消息不明

ウィンド・オブ・カタストロフィ（Wind・of・Catastrophe）

年齢：不明

性別：男

出身：魔力

残された血縁：妹

現在：消息不明

第一刻第一話：黎明堂

「ふーん…へえ…もうあれから１０年にもなるんだな」

「独り言五月蠅いですよ、所長」

「ほらほら、月も見てみるって。あの世界を震わした”血の炎”からもう１０年も経つんだとさ」

「……あの魔力の世界で起きた事件がですか…」

「……時間って言うのは、残酷だな」

とても質素で必要な物以外、特に何か置いてある訳でもない机で最初に声を発したのは、二十歳前後と推測できる青年だった。

第二ボタンまで外した白いシャツに学生が履くような黒のスラックス。質素と取れる服装に身を包む青年は窓の方をちらりと見ながら深いため息を吐いた。藍色の髪から覗く群青の瞳が僅かに揺れる。前髪を掻き上げながら、机に積まれた紙の束を片付けようと手を伸ばした。書かれた情報を頭の中に一読みで叩き込んでいく。他人よりは得意で自慢な能力だが、それはかなり精神が食われていく。再び前髪が落ちてこれば、やる気が失せてしまった。

一枚、また一枚と積まれた紙だったが、処理していないのとは違ってしまつと更にやる気が失せる。

——悪い癖だな、ほんと。時間が無いって言うのに。

声に出さないまま、作業を再開しようとすれば、視界に淡い水色のシャツが目に入る。見上げれば先程、話を振った少女が目の前に立

っていた。

一体何なのだろうか。

不思議に思いながら見ていると、無言で髪止めが差し出された。細めで近頃よく見かけるメタリックなピンク。そう言えば、彼女が時々使用しているのを見たような気がする。

「……………良かったら使ってください。……………さっきからその髪、鬱陶しそうなので」

「悪いな、月。有りがたく使わせてもらうわ」

「……………そんなに邪魔なら、いつそ切ってしまわれたらどうかと。それともバリカンで刈って差し上げましょうか？」

「例え美人なお前であろうとも慎んで遠慮を申し上げます。マジ止めてください」

「……………ちっ」

「おい、こら。今舌打ちしたよな…仮にも俺はお前の上司だし、歳も四つ上でだな――」

「あと、これ先程郵便受けに入っていたので目を通しておいてください。では、僕はこれで」

一方的に会話を切られてしまい、青年は渋そうな顔をした。

少女は何事も無かったかのように彼に規定サイズの茶封筒を渡せばスタスタと立ち去っていく。

閉じられた扉の先を見ながら、青年はまた深くため息を吐いた。

邪魔にならないように前髪を止めれば手渡された封筒をまじまじと見つめる。

いつもは適当に机の上の重ねられた書類の山に乘せられるのだが、わざわざと手渡したということはきっと何か重要なのだろう。

ここは対した名声も無く、街外れにへと追いやられた事務所、その名も黎明堂。

通称”何でも屋”と言われ、鍵の落とし物から街のゴミ拾い、暗殺までもを受け持つどこにでもありそうなその手の事務所だ。

普段は土地や周辺の調査など書類面が多いがときにはマフィアよりも質の悪く汚い仕事を引き受けるときもある。

所長を務めるのは、先程の青年。名はクリスタル・アンタッチャブル。

齢十九にしてこの事務所を設立した、異端児。正確には、祖父の代からのこの事務所を五年前、両親の謎の死をきっかけに引き継いだのだ。

腕を伸ばし軽く背伸びをすれば、再びその封筒を手にする。

差出人は記入無し。宛先は「黎明堂　クリスタル・アンタッチャブル殿」と記されていた。切手が貼っていない、ということは誰かが入れたのか。よくこれだけの無駄足を使うものだと思つたが口にはしなかった。

職業柄、どこで聞かれるかわからないからである。

カッターナイフを机の引き出しから出せば丁寧に封を切った。

取り出さずに中を覗くと、入っていたのは、二枚の紙切れと硬質なカードが一枚。嫌な予感がする。クリスタルはそれを一度置けば書類の山を机の引き出しに押し込んだ。こういうときに空けとくと便利だなと考えながら詰めていく。

それが終われば室内を見渡した。本棚に敷き詰められたファイルは硬質なカバーを付けてあるが、万が一ということもある。

折り畳まれていた扉を広げ次々と閉めていく。幾つもの繰り返しを行えば、所員の机を見回したが、重要なものは特に無いだろう、そう思って封筒に目をやった。

いや、あるにはあったのだが、自分より歳上の男が集めている学生向けのキャラがモチーフのフィギュアなど、命に関わることを考えればあと回しだ。また買ってやればいい。

———というか、文句があるならプラスチックのケースにでも入れ

とけ。

片付けた部屋で、自分の席に戻れば怪しげな封筒の中をぶちまけた薄い紙切れをまずは手に取る。

『拝啓、クリスタル・アンタッチャブル殿、及び黎明堂の皆様。

所長のクリスタル殿がこれが一番先に読んでいただくのが幸いです
が、黎明堂に関わる方なら構いません。

貴殿には解決してもらいたい仕事がありこのような手紙を出させて
いただきました。

決して難しいことはありません。

ただ最近街の中で目につく^{イヌ}狗犬を駆除してもらいたいです。

何、全部とはいかなくとも北の国へと続く道で吠えたてるものをお
となしくさせてほしいのです。

たった一晩で名を轟かせていた掟破りのマフィアを壊滅に追いやつ
た貴殿なら楽でしょう。

報酬は二百万。了承をいただけたのならすぐに実行をお願いします。
報酬金は確認次第振り込んでおきますので。』

一枚目に書かれていたのはたったこれだけだった。

「^{ボリス}狗犬……北の国への道……駆除……」

^{ボリス}警察ではないだろう。奴らが検問をしているのは南にある”武力の
市”と西の”療力の里”の間、南西にある”科力の島”の筈だ。
東にある”魔力の世界”はそう簡単に潜れる者などいない。
残るのは……

「…………語力の国、しかないか…………」

混じり合うようで混じり合わない、五つの世界に囲まれるこの場所。唯一の入り乱れる中心地。ここをわざわざ通り道にする必要は何だ。茶封筒に見えるこの製造マークは武力の市のものだ。何故隣にあるというのにここを通る必要があるのか。

考えたのは、たった数分の間だけだった。

一番ではないが、得意な分野の一つである状況把握を舐めてもらっちゃ困る。クリスタルは久しぶりに嘲笑いながら、残ったカードを見た。真っ白なカードだ。キャッシュ番号もあるということは銀行のカードだろうか。

それを手に取れば真っ二つにへし折った。パキン——意外と簡単に割れた。近くにあるゴミ箱へと捨てれば、見晴らしのいい窓を開け枠に手を、足を掛ける。革製の靴でも出来るだろう、きつと。

足音が聞こえた。

「悪いな、俺はあの馬鹿共よりは劣るが一応パルクールくらいは出来るのさ」

クリスタルはそう小さく言えば、逆上がりをするように窓から外を出ていった。

窓の上に位置する小さな軒の出に足をかければそこに飛び乗る。

瞬間、今さっきまでいたその窓は内側から粉々に砕け散った。あまり認識は出来ないが恐らくオートの十六連銃であろう、全く念入りだな。

「探せ！！子狗犬共はいいが、親狗犬だけは生きて捕らえる！！」

ドスの聞いたその声にクリスタルは確信に至った。

北への道を守る狗犬とは、即ち黎明堂のこと。黎明堂が街外れに位置する理由は手の足りない警察と昔から共同戦線を張るために、その一つとして北への門番をしているからだ。

きつと黎明堂を捕らえてしまえば知恵の足りない警察などすぐに退かせてしまふと考えたのだろう。

いや、黎明堂というよりは、クリスタル・アンタッチャブルを、だ。親狗犬とは所長を務める自分のことだろう。そんな簡単な指示、どこの小規模の組織なのだろうか。

クリスタルはあまりにも単純すぎてつい堪えながら笑った。

単純も単純、あんな手紙を出す前にさつさと片付けてしまえばいいものを。俺があんな手紙で油断などするものか。

彼はある程度使えるその業を使い、屋上へと目指した。

鍵なら閉めてある、まだ間に合う筈だ。

彼は、スラックスの後ろポケットに挟み込んであった携帯電話に似たような物を取り出せば、地上へと投げやった。

銀色の物体は、三階からアスファルトへと叩き付けられ、呆気なく簡単に壊れその破片は無惨に散りばめられた。

第一刻第一話：黎明堂（後書き）

— 第一話 —

人物紹介

クリスタル・アンタッチャブル（Crystal・Untouchable）

年齢：19歳

性別：男

誕生日：4月24日

血液型：O型

身長：182cm

体重：62kg

出身：語力

武器：適応話術

異名：『禁断の結晶』

補足：黎明堂の現所長、頭のキレる男。

一度読んだ文章は忘れない高い記憶力を持つ。

しかし代わりにやる気を無くしやすい。

彼に言葉で勝てるものは最低でも所内にはいない。

黎明堂を人助けの手段だと考えているものの、その腹黒い性格から、不影響なものへの徹底した言動が目立つ。

誰にも本気で怒ったことはなく、能力はあまり使わない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5598v/>

黎明の欠片

2011年10月9日13時16分発行